

扉 INTERVIEW  
開く



宗家花火鍵屋一五代目・国際柔道連盟審判員

# 天野安喜子

AMANO Akiko

創業約三六〇年の老舗花火屋「宗家花火鍵屋（注1）」の一五代目当主にして、世界で十指に入る柔道の国際審判員——異色の「二足のわらじ」を履く天野安喜子さん。日本の大学院で花火の芸術性を初めて研究した研究者でもある。男性が中心だった花火と柔道の厳しい世界で、どのようにして女性の先駆者となったのか。花火の現場と柔道の勝負にまつわるエピソードとともに語っていただいた。

# 五輪の柔道を裁く花火師

## 「五輪の暈」で体感する 選手の生きざま

——天野さんは伝統ある花火屋の一五代目当主を務めるとともに、柔道の国際審判員として世界各国の大会で活動されています。幼少期から大学卒業までは選手として柔道に打ち込み、国際大会で入賞するなど国内屈指の選手でした。柔道を始めたきっかけについてお聞かせください。

**天野** 私が小学校二年生の時、父が柔道場（富道館柔道天野道場）を開いた際、父に誘われて第一期門下生になったのがきっかけです。私は、花火師でもあり柔道家でもある父のこ

とが大好きで、父が教える道場で柔道ができ、どんどん強くなっていったので楽しかったですね。中学三年で国内強化選手になって練習がきつくなると、柔道が楽しくないと思う時もありましたが。結局、大学を卒業するまで、自分なりに柔道に打ち込みました。

——選手をやめた後、審判員になろうと思われたきっかけは、何だったのでしょうか。

**天野** 大学卒業後、花火工場で修業をしていた時に父からもらった、一本の電話がきっかけでした。当時父は東京都柔道連

盟役員で、連盟から父を経由して、現役を引退した私に白羽の矢が立ったらしいんです。ちょうど、五輪で女子柔道が正式種目になった時期で、女性審判員を育成する気運が高まっていた。先ほど申し上げたように、私にとって父は尊敬する存在でしたし、母からも「パパってすごいのよ」と暗示をかけられていました（笑）。そんな父からの誘いに、私は二つ返事で「やります」と。審判員になるためには、全日本柔道連盟が定めるS、A、B、Cの四段階の「公認審判員ライセンス」の筆記や実技試験に合格しなければなりません。上位ライセンスを取得すると、国際審判員ライセンスの試験を受験するチャンス

がもらえます。国際審判員として国際大会で経験を積み、その実績と評価により、国際柔道連盟から選ばれ、五輪の審判員になるのです。

——東京五輪での柔道の審判員一六人の一人として天野さんも選ばれました。五輪の暈は二〇〇八年の北京大会で経験されていますが、審判員として同じ暈に立って見て、他の国際大会と五輪では雰囲気は違いますか。

**天野** 全く違いますね。国によつては、五輪でメダルを獲得した選手はその後の人生が保

（注1）宗家花火鍵屋

江戸時代の一六五九年（万治二）、初代弥兵衛が日本橋で創業した花火屋の老舗。一七二一年（正徳五）、將軍徳川家宣の命により隅田川で初めて花火を打ち上げた。一九七六年（昭和五十一年）からは約一三九万人を動員する江戸川区花火大会（市川市共催）の打ち上げを手掛ける。「かぎや〜」「たまや〜」の掛け声で知られる。



あまの・あきこ ● 1970年東京都江戸川区出身。宗家花火鍵屋の次女として生まれ、2000年に15代目を襲名した。以来、観客動員数日本一を誇る東京・江戸川区花火大会のプロデュースなどを手掛ける。2009年日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了。博士（芸術学）。7歳で柔道を始め、中学から大学までトップ選手として活躍。1986年、高校1年生の時に福岡国際女子柔道選手権で銅メダル獲得。選手を引退後、2001年に国際柔道連盟審判員資格を取得。2008年の北京五輪では日本女性で初めて柔道競技審判員として派遣され、男子100キログラム級決勝の主審を務めた。その後も数々の国際大会で審判を務め、東京2020オリンピックの審判員にも選ばれている。

障されるなどと言われますし、コーチなどスタッフの生活まで背負って戦う選手もいると聞きます。そういう中で勝った選手の喜び、躍動感もさることながら、負けた選手の敗北感、虚脱感はずさまじい。私自身、「人はここまで抜け殻になれるのか」と、経験したことのない衝撃を受けました。そんな勝負を裁くことは責任が重すぎて、北京五輪の後に一度、このまま国際審判員を続けるか悩んだほどです。それでもここまで国際審判員を続けてこられたの

は、選手と畳の上で、真剣勝負の時間を共有できることのおかげがえのなき、そこに人生が凝縮されているからなのかもしれません。

——昨年十二月、東京五輪出場をかけた阿部一二三選手と丸山城志郎選手の試合（注2）で、主審を務められました。日本柔道界で前例のない一戦で、大きな注目を集めた勝負です。

天野 五輪出場がかかった世紀の一番を審判できることは大変光栄なことですが、ミスジャッジは許されない、非常に

プレッシャーのかかる一戦でした。ただ、私は主審の打診が来たら引き受けようと心に決めていました。勝者と敗者が、それぞれ天国と地獄を味わうであろう試合の、緊張感みなぎる時間を選手と共有したかった。主審をやること決まっていたから、誰にもそれを漏らさず、先入観を持つことがないように両選手に関する情報も遮断しました。試合は二四分という長い勝負でしたが、双方とも勝ちたいという気持ちが途切れる

## 「火の神が宿る」世界で味わった苦闘

——選手をやめてからは、小さい頃から決めていた花火師の道に進みます。

天野 実を言うと、私は花火師という職業に憧れていたわけではありません。この職業に真剣に向き合う父のような人になりました。私は三姉妹の次女でしたが、小学校二年生の時には、花火師になると決めていました。

瞬間がない、まさに死闘。勝負ですので勝敗はつきましたが、審判冥利に尽きる試合で、死力を振り絞って戦った二人には心から感謝と、そしてよくやったという気持ちでいっぱいでした。

（注2）阿部選手と丸山選手の一戦

昨年十二月十三日に東京・講道館で行われた、東京五輪の柔道男子六六キログラム級日本代表内定選手決定戦。日本柔道界で初めて、一試合のみの直接対決で行われ、開始から二四分の激闘の末、阿部選手が丸山選手に競り勝ち代表に内定した。

——創業約三六〇年の鍵屋で初めての女性当主です。先代のご令嬢とはいえ、男性が中心の花火の世界。「苦労が多かったのではないでしようか。」

天野 私が花火師になったころは「花火の現場は火の神が宿る場所」という感覚が残る男性社会でした。祖母から「女性が花火の現場に入ってはいけない」と教えられていたとおり、

女性をすんなり受け入れる環境ではなかったですね。ただ、大学まで打ち込んできた柔道も、女子選手の少ない時代の中でやってきましたから、性別の垣根の高さで苦勞を感じることはなかったです。

それよりも、先代である父のような存在になるにはどうしたらいいかで随分もがきました。特に職人さんとのコミュニケーションがうまくいきませんでした。父の指示を私が伝えても「何でお前の言うことを聞かなきゃいけないんだ」という顔をされる。皆、私が一五代目当主になることを知ってはいませんが、職人さんの世界ではそんな肩書は通用しない。そんな中で、自分の存在を早く認めてもらいたいという焦り、そして自分は先代の娘なんだという気持ちもどこか態度に出ていたのでしょうか。これでは誰も付いてきてくれません。その時は苦しかったですね。花火師の仕事は自分一人だけの力ではできません。それを、自分一人で切り盛りしようと躍起になっ

ていたのかもしれないですね。

さまざまなトラブルを共に解消していき、肩の力がふっと抜けて、「こんな私でよかったら一緒に仕事をしてください」と自然体になれて初めて、天野安喜子という私自身の存在が職人さんに認められるようになった気がします。もちろん、当主として人の三倍以上働かなければいけないし、観客に「一喜んでもらうためには花火師は「十以上」の努力をしなければいけない。その上で、職人集団を率いるには、当主の度量や人間性が試されていたのだと、今振り返れば思います。

——鍵屋の花火は江戸の昔からあったわけですが、花火の現代らしさはどこに見いだしていますか。

天野 鍵屋は創業以来、各世代が花火を研究し、菊や牡丹のように丸く開いたり、赤・青・緑に発色したりするなど改良を重ねてきました。そうした技術は受け継ぎつつ、今は花火大会を一つの舞台と捉え、演出面を重視しています。例えば「雪

降り積もる白富士」というテーマの場合、私はまずそのストーリーを考えるんです。雪が降る前の静けさから始まり、次にしんと雪が降り積もり、最後に白富士の姿が月に映えて浮かび上がるまでを、花火の色・形・光・音を駆使しながらどう表現するか。花火の打ち上げ位置やリズムも考えて秒単位のシナリオにまとめ、花火で表現します。製造元に玉名(花火玉の名前の総称)を指定して花火を作ってもらい、現場で流す音楽を考えながら、いかにそのストーリーを観客に感じていた

だけか。現代の鍵屋は花火のありとあらゆることを統括するプロデューサーなんです。花火というと、夜空に広がる色や形、光に注目しがちですが、実は華やかな花火を引き立たせるための「間」——静けさ、日本古来の文化であるわび・さびと言ってもいいかもしれません——が大事なんです。観客から発せられる「気」を感じ取り、間を計り、「今！」という瞬間に花火を打ち上げる合図を送る。一時間余りの花火大会であれば二五〇回くらい、私は職人さんに合図を送り続けているんです。

## 花火は疫病を鎮めて人の心も癒やす

——天野さんは鍵屋一五代目を継承された後、花火をテーマに芸術学の博士号を取得されるなど、花火の進化を追い求めておられます。

天野 花火は火薬学という工学として研究されることはありましたが、芸術学の分野の対



た。花火の色・光・形・音のうち、音が観客の印象に与える影響が強いということデータを裏付けたんです。以来、—先ほどの「間」も含めてですが—私は花火音や現場の音響効果など「音の演出」に力を入れています。

— 昨年は新型コロナウイルスの感染拡大で全国の花火大会が相次いで中止になり、花火を楽しむ機会が少なくなりました。

**天野** 私は、「花火を愛でる場」コミュニケーションの場」だと思っています。夜空にきらめく花火を見て、そこにたまたま居合わせた見ず知らずの人同士に会話が生まれる。そうさせる力が花火にはあります。今、コロナ禍で人とのコミュニケーションがままならないもどかしい状況ですが、明けない夜はありません。

もともと花火は、江戸時代から、疫病退散と死者の魂の慰霊を祈願して始まったものです。花火は火を扱いますから、浄化の役目も果たすとされています。こういう困難な時代からこそ花火の出番だと思い、鍵屋では昨年、人の密集を避けるため、時間や場所を非公表にして、何カ所かで花火を打ち上げました。

花火を打ち上げ終えた後、ある女性から感謝のメールを頂きました。「息子がどこかで花火の音がするということで、私は、壊れかけていた洗濯機の音じゃないのと受け流していま

した。でも私の耳にも音が響いてくる。二人で玄関を出たら、大空の花火の光にパッと包まれました。『花火、本当だったね』と息子に言う前に、不意に涙が出てきました。『そう書いてありました。花火がこんなに人の心を揺さぶるのかと思いましたし、先が見えず不安で下を向きがちな時代からこそ、上を見上げて、夜空に咲く大輪の花火を見て元気になってもらうことが大事だ』という思いを一層強くしました。

— 柔道の国際大会での審判員、そして老舗の花火屋の五代目という「二足のわらじ」は大変ではないですか。

**天野** 私の中では二つに分けて役目を務めているわけではありません。二つを兼ねることにより得られることは多いと感じています。

花火で最も気を使うのは「安全」です。火薬に点火するときは「みんな離れて」と注意するのが普通ですが、花火だけは「寄ってきて観てください

い」と人を集めることになる。現場は常に危険と隣り合わせなので、「絶対に事故を起こしてはならない」という覚悟が花火師には必要です。花火師は経験を積んでも気を緩めることはできません。現場監督である私が迷えば現場は混乱する。不安を乗り越えるだけの準備と覚悟が必要です。それは柔道の審判も同じです。審判は、「誤審は絶対に許されない」というギリギリの緊張感の中で試合を裁く覚悟が要ります。審判が迷えば選手は不安になり、試合は成り立ちません。「覚悟」を以て物事に臨むという点において、花火師と柔道の審判員には相通じるものがあります。

父の影響で導かれるように始めた花火師とそして柔道の審判員。分野は違えど、この二つを極め、皆さんから求められる存在であり続けたいですね。

— 本日は、ありがとうございました。

(聞き手／情報サービス局長 渡邊昌二)